

示-117 高齢者肺癌の予後因子に関する検討

神戸市立中央病院 呼吸器内科

○岩崎博信, 長谷川幹, 片上信之, 坂本廣子,
李 英徹, 石原亨介, 梅田文一, 中井 準

〔目的〕 高齢者肺癌の予後に影響を及ぼす因子を明確にし, 各種治療の意義を検討する。〔対象と方法〕 昭和50年から59年末までに入院した70才以上の肺癌270例(75才以上130例, 腺癌95例, 扁平上皮癌101例, IⅡ期86例, III期87例, IV期89例)について, 年齢性別, 臨床病期, 治療前PS, 体重減少, 血液検査, 治療法等に関し適宜層別化し生命表分析を行った。

〔結果〕 75才を境として2群にわけ生存率を比較すると, 扁平上皮癌の中間生存期間はいずれも47週で有意差がないが, 75才以上群は切除例が有意に少いため3年以後の長期予後が劣っていた。腺癌の中間生存期間は各々37週と38週で有意差を認めないが, 非切除腺癌の累積2生率はPSや病期に有意差が無いのに75才以上群は20%で, 75才未満群の4%に比し有意に良好であった。Coxの重回帰型生命表法で検討すると, PSと病期が組織型を問わず予後を規定する因子として有意で, 扁平上皮癌では手術と放射線療法が有意に予後を改善するが, 腺癌では各種治療の延命効果は有意でなかった。血液検査のみを取り入れた場合, 扁平上皮癌ではAlbumin, LDH, Hb が, 腺癌ではLDHとALPが有意であった。〔結論〕 高齢者肺癌の予後因子としては, PSと臨床病期が重要で, 年齢の比重は小さく, 扁平上皮癌では手術と放射線療法が予後を改善するが, 腺癌では各種治療の延命効果は有意とは言えなかった。

示-119 高齢者肺癌の臨床的検討

浜松医科大学第2内科

○秋山仁一郎, 岩田政敏, 源馬 均, 岡野昌彦,
谷口正実, 本田和徳, 佐藤篤彦

昭和54年より60年までの6年間に当科に入院した肺癌患者115例のうち, 70才以上の高齢者は49例(42.6%)であった。更に70~74才群27例と75才以上群22例に分けて検討した。

組織型別では扁平上皮癌70~74才・9例/75才以上・10例, 腺癌10例/3例, 小細胞癌4例/5例, 大細胞癌0/1例, その他4例/3例であり, 臨床病期別ではI期70~74才・6例/75才以上・3例, II期2例/3例, III期7例/6例, IV期12例/10例と両群共小細胞癌とIV期が多かった。治療は手術70~74才・6例/75才以上・1例, 放射線療法4例/8例, 化学療法10例/7例, 未治療7例/6例であった。

70~74才群の化学療法は奏効率40%, 1年生存率30%であり, 75才以上群では奏効率28.6%, 1年生存率14.3%であったが, いずれも小細胞癌をそれぞれ4例/5例含んでいた。更に他の治療法と予後につき報告する。

示-118 若年者肺癌, 高齢者肺癌の臨床的検討

獨協医科大学越谷病院呼吸器内科

○飯土用誠也, 岩田祥吾, 一和多俊男, 平岡仁志,
浜島吉男, 長尾光修, 内山照雄

昭和59年開院以来2年間に91例の原発性肺癌を経験し, そのうち若年者肺癌(40歳未満)は6例(6.6%), 高齢者肺癌(80歳以上)は9例(9.9%)であった。若年者肺癌は男性4例, 女性2例で平均年齢35.5歳。I, II期はなくIII期2例, IV期4例と進行例が多い。男性III期1例がSqの他はすべてAdであった。全例有症状で受診し, 喫煙歴は男性全例にあり女性にはない。III期Sqに手術+化療+放治を行なったが初診より6ヶ月後に癌死した。III期Adは化療により4ヶ月生存中である。IV期4例は初診より平均56.8日で全例が癌死した。

高齢者肺癌は男性7例, 女性2例で平均年齢81.9歳。

I期2例, III期2例, IV期5例と若年者と同様進行例が多い。Sq5例(全例男性, I期1例, III期2例, IV期2例), Ad3例(男性1例, 女性2例, I期1例, IV期2例), Sm(男性, IV期)であり, 全例有症状で受診し, 喫煙歴は男性全例にあり女性にはない。I期2例は, 低肺機能, 高齢のため化療のみ行ない, それぞれ12ヶ月, 18ヶ月健在である。III期2例も3ヶ月, 2年2ヶ月生存中である。IV期5例中4例は初診より平均59.5日で癌死したが, 1例は1年6ヶ月生存している。

若年者肺癌, 高齢者肺癌を40~79歳の各年代別の肺癌例と病期, 組織型, 治療, 予後について比較検討し, さらに症状発現から確定診断までの期間を患者側因子, 医師側因子として分析し, 代表的な症例を呈示する。

示-120 旧大久野島毒ガス傷害者における体細胞突然変異率の測定

広島大学第2内科¹; 国立療養所柳井病院²; 放射線影響研究所³; 忠海病院⁴;

○柳田実利¹; 保澤総一郎¹; 稲水 惇²; 箱田雅之³;
秋山実利³; 石岡伸一¹; 高石雅敏¹; 松阪 茂¹;
行武正刀⁴; 山木戸道郎¹; 西本幸男¹

目的: 旧大久野島毒ガス傷害者は, マスタードガスに起因する, 気道癌等の悪性腫瘍の好発群である。今回は, 体細胞突然変異率を測定したので報告する。

方法: 対象は, 健常者(NC)17例, 非毒ガス慢性気管支炎患者(CB)10例, 毒ガス傷害者(PG)28例である。突然変異率は, 6-thioguanine(6-TG)耐性(HGPRT欠損)リンパ球の頻度を指標とした。すなわち, 96wellマイクロプレートに, 末梢血リンパ球を, 限界希釈法により1 cell/wellに分注したcontrol plateと, 1×10^5 cells/wellに分注し6-TGを加えたselection plateを, 武田薬品より供与されたrIL-2(TGP-3)と, ヒトリンパ球のPHA刺激培養上清を用いて培養し, 各々のplateのコロニー陽性well数より, 突然変異率を求めた。

結果: 突然変異率は, NC: $4.14 \pm 1.24 (\times 10^{-6})$, CB: $4.21 \pm 1.22 (\times 10^{-6})$, PG: $5.24 \pm 2.05 (\times 10^{-6})$ であり, NCに比べPGで高い傾向($P < 0.1$)が認められた。また, PGのうち, マスタードガスに接触する機会の多かった職種A群とB群および毒ガス工場での就業期間が5年以上の群では, NCに比べ有意の高値($P < 0.05$)を示した。